

第四章 名古屋と松山の 収容所比較

100781005 伊藤 善高

1、名古屋における収容数の推移

1904年11月28日 名古屋初の捕虜新来
下士以下200名、松山より転送
翌月12月にも、
下士卒300名、松山より転送

年明け、1905年1月

旅順要塞のロシア軍の降伏

1月16日 下士兵卒500名の収容

19~21日 フォーク中将、ニキーチン
中将、メフマンダロフ少将、イルマン
少将、スミルノフ中将、ベールイ少将
ウィレン提督の将官7名、 その副官・
従卒の収容

2月 セミヨーフ少将以下、将校・従
卒199名を松山より転送

2月末時点 名古屋では1220余名を収容

5月 250名 習志野への転出
→ 収容数一時減少

8月 樺太戦

→ 捕虜1000名以上が青森より転送

9月 樺太より捕虜1000名弱の追加

講和締結後の統計 全収容者数3792名

内訳 将校 → 163名

下士卒兵 → 3629名

2 捕虜の暮らしと自由散歩

旅順の将官の待遇

フォーク中将

ニキーチン中将

メフマンダロフ少将

イルマン少将

の4名



東本願寺に収容

スミルノフ中将

ベールイ少将

ウィレン提督

セミヨーノフ少将

の4名



西本願寺に収容

将官 → 居室

副官・従卒 → 将官の隣室に入居

一般の下士兵卒 → 「会所」に収容

収容所内

炊事場 酒保 図書館 の完備

1、捕虜の食事

通常 → 自炊

食費など → 日本側の貸与金

「糧食費標準額」

将校・准士官 → 日額 60 銭

下士兵卒 → 日額 30 銭

高級将校 → 洋食のデリバリー

1日の食料費 「5円」

2、捕虜の外出・散歩

収容所所員・巡査の同伴

→ 収容所外の散歩許可

将校限定、

宣誓書の携帯

一定区域・時間内

郵便・電信の送受禁止

の条件下



自由外出許可

3、正教会と「俘虜信仰慰安会」

1861年 宣教師ニコライにより、
日本にロシア正教伝来

1900年 ロシア正教は日本で
2番目の信徒数を保持

捕虜の宗教的援助

「俘虜信仰慰安会」を組織

→ 日本人教役者中心

ロシア軍将兵の大半 → 正教徒

捕虜に対する宗教的慰安の必要性

俘虜信仰慰安会の活動内容

不慮の日常生活に

不可欠な祈祷式の執行

名古屋の

東本願寺収容所と西本願寺収容所の

祈祷室にイコノスタスの建造

1905年6月

西本願寺のイコノスタス千種町に移設

おわりに

講和条約発効後、

1905年11月

名古屋からロシアへ捕虜引き渡し開始

1906年2月14日 引き渡し完了

17日 名古屋収容所閉鎖

柴山神父

15名の病死した捕虜の墓碑と記念碑の
建立に尽力